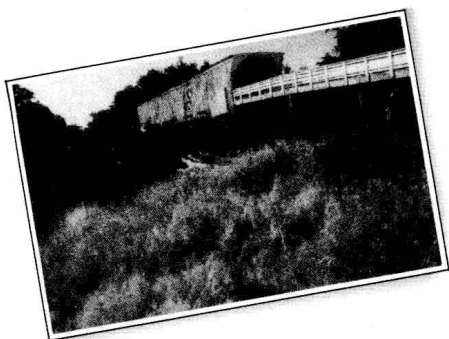


THE
BRIDGES
OF
MADISON
COUNTY





マディソン郡の橋

ロバート・ジェームズ・ウォラー
村松 潔 訳

THE BRIDGES OF MADISON COUNTY
BY ROBERT JAMES WALLER
COPYRIGHT © 1992 BY ROBERT JAMES WALLER
JAPANESE TRANSLATION RIGHTS RESERVED BY BUNGEISHUNJU LTD.
BY ARRANGEMENT WITH THE AARON M. PRIEST LITERARY AGENCY, NEW YORK
THROUGH TUTTLE-MORI AGENCY, INC., TOKYO
PRINTED IN JAPAN

マディソン郡の橋

一九九三年三月二五日第一刷
一九九三年五月二〇日第七刷

著者 ロバート・ジェームズ・ウォラー

訳者 村松潔

発行者 松浦伶

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三—二三 102

電話〓〇三—三二六五—一二二一

印刷所 凸版印刷

製本所 加藤製本

万一、落丁・乱丁があれば送料当社負担でお取替え
いたします。小社営業部宛お送りください。

定価はカバーに表示しております。

ISBN4—16—313840—4

放浪者たち^{ハヤフサ}に

目次

はじまり 7

ロバート・キンケイド 17

フランチェスカ 35

古代の夕べ、はるかな音楽 79

火曜日の橋 93

ふたたびダンスのできる余地 119

ハイウェイとハヤブサ 139

灰 157

フランチェスカの手紙 179

あとがき——タコマのナイトホーク 197

訳者あとがき 209

装幀

写真レイアウト

坂田政則

マディソン郡の橋

は
じ
ま
り

どこにでもある田舎道の土埃つちぼこりのなかから、道端の一輪の花から、聞こえてくる歌声がある。これはそういう歌声のひとつである。一九八九年の秋、ある日の午後遅く、わたしが机に向かって、コンピューターの画面上で点滅するカーソルを見つめていると、電話が鳴った。

電話の主は、マイケル・ジョンソンという人物だった。かつてはアイオワ州の住人だったが、いまはフロリダで暮らしているという。アイオワの友人がわたしの著書を彼に送った。マイケル・ジョンソンはそれを読み、妹のキャロリンもそれを読んだ。で、わたしが興味をもつかもしれない話があるという。彼は非常に用心深く、それがどんな話なのか電話では一言も説明しようとしなかった。ただ、妹といっしょにアイオワまで出向いて、わたしにじかに話せるのなら、喜んでそうしたいというのである。

わたしはそういう申し出には耳を貸さないほうなのだが、彼らがそんな手間をかけてまで話し

たがっているという事実に興味をそそられた。そこで、翌週、そのふたりとデモインで会うことにした。約束の当日、空港の近くのホリデイ・インで、たがいにより紹介を済ませると、ふたりはわたしの向かい側に腰をおろした。ぎこちなさはしだいに薄れ、外には夜の帳とまりがおり、雪もちらつきだした。

ひとつだけ約束してほしいことがある、と彼らは言った。わたしがこの話を書かないことにした場合、一九六五年にアイオワ州マディソン郡で起こったことや、それに関連してその後二十四年間に起こったことについては、けっしてだれにも話さないでほしいという。よろしい、それはもっともな要求だ。結局のところ、これは彼らの話であり、わたしの話ではないのだから。

というわけで、わたしは耳を傾けた。わたしはじつと耳を傾け、ときおり突っ込んだ質問をした。彼らは話した。彼らは延々と話しつづけた。キャロリンはときおりあふれる涙を隠そうともせず、マイケルは懸命に涙をこらえた。ふたりはわたしに話の裏付けになる資料を——雑誌の切り抜きや、彼らの母親フランチェスカが残した日記を見せてくれた。

何度となくルームサーヴィスが出たり入ったりし、追加のコーヒーが届けられた。そうしてふたりの話を聞いているうちに、ひとつのイメージが浮かんできた。まず初めにイメージが浮かばなければならぬ。言葉はあとからやってくる。やがて、わたしの耳元で言葉が聞こえだし、それが紙の上で文章になっていくところが目に浮かんだ。夜中の十二時を少しまわったころ、わたしはその話について書くことを——少なくとも、書くこととしてみることを承諾した。

ふたりがこの話を公表することに決めたのは、かなり迷ったすえのことだった。自分たちの母親に関わる——そして多少は父親にも関係する——話だけに、問題はデリケートだった。この話が公表されれば、リチャードとフランチェスカのジョンソン夫妻について人々が抱いているイメージが、安っぽいゴシップや冷たい軽蔑の視線にさらされないともかぎらない。

それでも、人と人との関わりがどんどん薄っぺらになり、愛が便宜的なものになりかけているこの世界では、こういうすばらしい話を人々に知らせずにおくべきではない、とこのふたりは考えた。わたしもたしかにそのとおりだと思ったし、いまでは以前にもましてそう確信している。

その後、取材と執筆を進める過程で、わたしはさらに三度マイケルとキャロリンに会ってくれるように頼んだが、そのたびに、彼らは不平ももらさずに、アイオワまで出向いてくれた。それほどまでに、彼らはこの話を正確に伝えたいと思っていたのである。ときには、わたしはひたすら彼らの話を聞き、またときには、マディソン郡の道路をゆっくり走りながら、この話のなかで重要な役割を演じた場所を教えてもらった。

これからお話しする物語は、フランチェスカ・ジョンソンの日記の内容をもとに、マイケルとキャロリンの助けを借りて書いたものである。これを書くために、わたしは米国北西部、とりわけワシントン州シアトルとベリングハムで取材し、アイオワ州マディソン郡でも目立たないように調査を行なった。さらに、ロバート・キンケイドのフォト・エッセイを参考にし、雑誌の編集者たちにも協力してもらい、フィルムや写真機材のメーカーからいろいろな話を聞かせてもらっ

た。そして、オハイオ州バーンズヴィルの老人ホームでは、少年時代のキンケイドを覚えていた数人のすてきな老人たちと長々と話しこんだりした。

そんなふうには調査したにもかかわらず、いくつか空白の部分が残った。そういう場合、わたしはちょっぴり自分の想像力を使ってそれを補ったが、それはあくまでも調査を通してフランチェスカ・ジョンソンとロバート・キンケイドを熟知したうえで、道理にかなった判断ができる場合に限定した。したがって、実際に起こったことをかなり忠実に再現できたものと自負している。

調査で埋められなかった大きな空隙のひとつは、キンケイドが合衆国北部を横断したときの旅の様子だった。彼はその後何枚も写真を発表しているし、フランチェスカ・ジョンソンも日記のなかでふれており、雑誌の編集者のもとに手書きのメモが残されていたので、キンケイドがこの旅をしたことははっきりしていた。そこで、わたしはこういう資料を指針にして、一九六五年八月に彼がたどったと思われる、ベリングハムからマディソン郡までの道をたどってみた。その旅が終わりに近づき、車でマディソン郡に入っていくころには、わたしはいろんな意味でロバート・キンケイドになったような気がしたものだ。

それでもなお、キンケイドという人間の本質をとらえることが、この本の取材と執筆における最大の難問だった。彼はとらえどころのない人間だった。ときには非常に平凡な人物に見えるのだが、別のときには、ふわふわして実体がなく、幽霊ではないかとさえ思われた。仕事については、キンケイドは熟練したプロだった。けれども彼は、あらゆるものが組織に組み込まれていく

この世界にあって、いまや自分は時代遅れになりつつある特異な男性的動物の一種だと考えていた。彼は自分の頭のなかで時間が「激しく泣き叫んでいる」と言っているし、フランチェスカ・ジョンソンは彼を評して、「ダーウィンの進化の樹をはるか彼方まで遡^{さかのぼ}った、奇妙な、幽霊が出るような場所」に住んでいる人だと言っている。

ほかにも、いまだにわからない不思議なことがふたつある。ひとつは、キンケイドの写真のファイルの行方である。その仕事の性質上、少なくとも数千枚、おそらくは数万枚の写真があったはずなのだが、それが一枚も見つかっていない。いちばん考えられるのは——これは彼が自分はどう見ていたか、自分が世の中のどんな位置にいると思っていたかを考えると、うなずけなくもないが——死に先立って、彼がすべてを自分の手で処分したのではないかということである。

もうひとつの疑問は、一九七五年から一九八二年にかけての彼の生活のことで、これについてもごくわずかな情報しか入手できなかった。わかっているのは、数年のあいだ、シアトルで肖像写真を撮って細々と生計を立てていたことと、ピュージェット湾近辺の写真を撮りつづけていたことだけである。ほかにはなにひとつわからない。ひとつだけ、ちょっと面白いのは、社会保障局や復員軍人局からの郵便物が、すべて「送り主に返送のこと」と彼の筆跡で書かれて、送り返されていることだった。

この本のためにいろいろ調べたり、実際にこの本を書いていくうちに、わたしの世界観は変り、物の見方も変った。とりわけ、人と人との関係において何が可能かということについて、以前ほ

ど冷笑的な考え方をしなくなった。調査を通してフランチェスカ・ジョンソンとロバート・キンケイドを知るにつれて、こういう関係がそれまで思っていたよりもずっと長く続くことがあると思うようになったのである。この本をお読みになるあなたもあるいは同じような経験をされるかもしれない。

それはもちろん容易なことではないだろう。日に日に無神経になっていくこの世界で、わたしたちは瘡蓋^{かさぶた}だらけの感受性の殻に閉じこもって暮らしている。どこまでが大いなる情熱で、どこからつまらない感傷がはじまるのか、わたしにはよくわからない。わたしたちは大恋愛であるかもしれないものをせせら笑い、純粹な深い感情に感傷のレッテルを貼ってしまいがちだ。フランチェスカ・ジョンソンとロバート・キンケイドの物語を理解するのは、そのために必要なやさしきをもつのは、わたしたちにはけっして楽なことではない。じつは、わたし自身、この物語を書きはじめるまえに、まず自分のなかのそういう傾向を克服しなければならなかった。

けれども、そういう不信はしばらく括弧^{かっこ}に入れて、この物語を読んでいただきたい。そうすれば、コールリッジが言ったように、わたしが体験したものをあなたも体験するにちがいない。そして、ひょっとするとあなたも、フランチェスカ・ジョンソンと同じように、自分の心の偏見のない片隅に、ふたたびダンスをする余地があるのを発見するかもしれない。